

第1回セミナーを4月25日(土)13:30~15:30に開催しました。参加者の皆さんよりお預かりしたリフレクションをまとめました。

会場 愛知文教大学 201教室

テーマ 「子どもが進める授業を支える教師の考え」

— 新城市立新城小学校4年社会科「私たちの暮らしと道」を通して —

コメンテーター 学び合う学び研究所シニアフェロー 的場 正美先生

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、教師の出 よく聞き、よく見極めて、どんな言葉でどのタイミングで、働きかけるのかということを考えました。拮抗というのがひとつのキーワードだなと感じました。

1991年にすでに学びの授業をしていたという事実には驚きました。教師のもつ、深い専門性と、豊かな人間性、子どもとの信頼関係が授業に現れていて、元氣と勇氣をもらえました。グループや他の参加者の先生方とお話しできたこともとても励みになりました。ありがとうございました。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、コトバによる分節化です。

授業内の調べたことを元に話し合う場面は、子どもたちが皆、「自分の意見をどのように伝えるか」「どのようなことを伝えたら相手は納得するのか」ということなどについて、頭を使っているように感じた。また、意見が出しづらいような子どもに司会進行やまとめ役をやらせ、その子のボキャブラリーを育てている。社会の授業を通して、子どもたちはコトバによる分節化を行っており、話し合いの内容だけでなく伝え方、納得のさせ方などを自分の認知世界に落とし込んでいくように感じた。

それらを、小学生のレベルに合わせて計画していることに驚きがあった。とても勉強になる時間だった。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、授業の主役はやはり児童生徒であることを確認できました。

児童の主体性を引き出すことで、授業が深まり、児童の学びの保証に繋がることを感じました。その主体性を引き出すことが難しいのですが、今回のセミナーで幾つかのヒントを得ることができました。ありがとうございました。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、授業を観る力、実践する力を磨くためには、やはり子どもの学びの事実(発言や表情、内に秘めているもの等)に目を向けることが重要だと思う。そのためにも、発言記録など、授業について言語化して、リフレクションすることが肝要であるということです。

授業研究とは何かということを研究的視点から学ぶことができた。また、子どもが切実感のある課題に対して、多面的多角的に考え、夢中になって学ぶ授業を拝見することができ、とても刺激をいただいた。本日学んだ授業研究の方法や視点、子どもが進める授業を支える教師の考えなどを勤務校にも還元していきたい。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、授業者の介入についてです。

子どもが進める授業

子どもたちが授業中にあれほど感情的に意見を出し合うことに驚いた。それにもかかわらず、最後には次の授業に向けての課題が子どもたちから生じていたのが、素晴らしいと思ったり。

授業中の拮抗状態の際に教師の支援で次の段階へ繋げて行くためにはどうすればいいのだろうか。子どもが進める授業ができるように普段の学級経営や授業でどのようなことを意識されていたのか知りたいよ思った。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、逐語記録やビデオをみるたびに新たな学びがうまれるということです。

的場先生ありがとうございました。

ビデオをみて、聴いている生徒の動き等を丸ごと身体で感じ、微かな変化や差異をとらえようと思いました。逐語記録に目を落とす時間がとれないほど必死でした。

的場先生のご講義どおりに、一括りに概念等にまとめ、簡単にわかった気にならないよう

に努力しました。未熟な私にはかなり難しいアカデミックな課題でした。

的場先生のお話や専門家の皆さまの語りを聴く中で、次第に、個々の事実やつながりが少しずつ映像として浮かんできたように感じました。

言語化するのがいいのかどうかはまだよくわかりませんが、このリフレクションにより、私の中で何かが起き始めているような気がしています。来月のセミナーでの学びもたのしみです。よろしくお願いいたします。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、中間項：教育学者や教師に理解されないことを含めてです。

ビデオの新城小学校は、その昔参観に訪れたことがあります。研究協議会で「教師の出」が話題になっていた時に、渥美校長が「しゃらくさい、10年早い」と厳しく語ったことを思い出しました。このビデオのように本気で話し合えるようになってから、教師の出が語れるのであって、その日観た授業のような子どもから本気の発言もない授業に対して、教師の出など語るべきではない、という渥美校長の苛立ちのようなものを感じたことを思い出しました。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、社会の授業中で、法律、今までのアンケート、これから調べること、など、事実に触れようとしたとき、子どもは冷静に考えようとすると感じた。

私の勤務する地域では、近年、校内研究会がさかんに行われるようになっていきます。しかしながら、学力検査においてはどちらかというところ下がる傾向が見られ、なかなか学力が定着していません。一方、対話的な活動が常時行われるようになった学校では、学力が少しずつではあるが向上してきています。それらの様子を見るなかで、紙面上にも、パソコン上にも表現されない子どもたちの対話の中に、大切な学びがあるのではないかと、考えるようになってきています。今日の研修では、最近、モヤモヤしている中で、多くのことをスッキリさせていただけました気がします。

以下、今日印象に残ったことをメモしていきます。子どもを抽象的な個性としてではなく「異なるものを異なれるものとして」。この人ってこう考えたんだね、この人はこう捉えたんだ。学校は価値が葛藤する。授業は理論じゃない、授業者が真剣に悩む姿に意味がある。考えたことを言葉にすることが難しい。認知心理学の言葉と、授業研究の言葉はなかなか合わない。言葉と言葉が行き来することで妥当性がうまれてくる。

授業の分析での学び。①長い単元がしっかりと練られている。②教師のタイミングの良さ。生徒の価値観を変える言葉の選択。③5時間完了の単元構成でも、子どもがもっと考えたいと思えば、増やすべきである。④中心的な生徒の話聞く中で、発言の回数は少ないが、考えが変化している生徒がいるように感じた。

的場先生の研修は大変勉強になりました。自分が教育者として、勉強がまったく足りていないことを肌で感じる事ができました。また、同じグループの中島先生、宮川先生と、退職して大学で勉強し直している方のお話を聞くことができ、私も勉強していかなくては、と思いました。

大変刺激の多い1日となりました。ありがとうございました。

子どもが進める授業の裏側には、教師の緻密な現状分析と、様々な仕掛けがありました。主体的に学ぶのは確かに子どもですが、その授業をつくることのできるのは教師だけだと思います。学びを構成するデザイン力の素晴らしさを見せつけられた、素晴らしい授業でした。

また、的場先生の授業分析にかける思いが感じられる講義があり、思わず聞き入ってしまいました。特に、「中間項」において、新しい記号が生まれるときは、新しい概念が生まれるときという言葉が残っています。授業分析に正解はありませんが、正解に近づこうとする過程に新たな意味が生まれると思います。ありがとうございました。

今日のセミナーで学習した中で重要だと思ったことは、教師の出の難しさです。

久しぶりに、児童同士の激しいやり取りを聞きました。あれだけ自信を持って発言するからには、自分なりの調査や聞き取りなど根拠にもとづいたものだと思います。教師もそのやり取りを授業の中程まであまり介入することなく、見守っていたのは素晴らしいと思いました。

授業の中盤をすぎた 213 あたりから、教師は他の児童の意見を求めたり、258 で「つなげて考えてみて」と議論の広がりをも求めたりすることで、これまでとは違う冷静な発言や広がりも生まれていました。D さん J さんのやり取りが基になっているだけに、もう少し早い段階で他の意見を求めたりグループにすることがあると、新たな気づきも生まれ、別な展開になっていたのかも知れません。その点がやや惜しまれます。また、それまでの論点を整理したり視点を与えたりするために板書を活かすと分かりやすかったのではと思いました。

教師がどのタイミングでどんな足場かけをするとよいのか、その難しさはいつの時代も変わらないと思います。意見交流の前提にどこまで根拠を持っているか、どのような下調べをしているかも大切ですが、教師の出方について、改めてその重要性和奥深さ、学び続けることの大切さを学びました。